
おじゃまんマンション

水色/青空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おじやまんマンション

【Zコード】

Z2971A

【作者名】

水色／青空

【あらすじ】

彼女がいなくなつて3年・・・・。でたらめな管理人と彼女に振り回される可哀想な住民たちのドタバタマンションコメディ。

プロローグ

3年前、叔母が消えた。

叔母といつてもまだ若く、たぶん今は20、21くらいの年だろう。若いがゆえに消えた理由も単純だった。

夢のため。そのために彼女は消えたのだ。

なんの夢だったかは知らないが、とんでもなく迷惑な夢だということはわかる。あの人の性格からしてそんなカンジだろう。

はちゃめちゃで、台風のような人だった。彼女との思い出はどれもイタイものばかりだった。私が5歳のとき、彼女と私達家族が山登りをしたときも、私が彼女を信用したため、2人そろって遭難し、わけのわからん宗教団体にお世話になったという記憶がある。あとは、8さいのころに宇宙人との交信に夜中まで付き合わされたり、・
・
・
・
・もうキリがない。

だが、私は彼女に対し、感謝してもしきれないほどの恩がある。何年も前のことだ。彼女はとうの昔にわすれてしまつたに違いない。でも、私にとつてはとてもなくありがたいことだったのだ。

だけど私は礼をいわなかつた。いや、礼どころか文句もいえなかつた。

翌日、彼女はいなくなつていたのだ。

プロローグ（後書き）

初めてなので、『指導』『鞭撻の狂』、よろしくお願ひします。

第一話・ねじゅまなヒーロー（前書き）

少し長いかもしませんが、一応連載モノです。

第1階・おじやまんなヒーロー

あのとき、彼女は確かにこいつ言った。

「3年後にね、内地（大和）であるマンションが建つの。そこでね、管理人募集してゐみたいなのよ。・・・・・いいわよね～、管理人。おもしろそうだわ」

キラリと彼女の目が光つたのを、私は見逃さなかつた。

『おじやまんマンション』

2、3ヶ月前に建つたばかりの、何故かあやしいと噂があるマンション。

別に古くさくはないのだ。きれいで立派なマンションだ。だが、夜な夜な女の怒鳴り声や、ガガガ～とか、バキベキッとか変な音がマンションから聞こえてくる。たぶん噂の原因はこれなのでないかと思われる。

そんなどこかに、毎晩から3つの影が入つていつた。

「普通のマンションやつし」

なまりのあるイントネーションで、ショートカットの女の子が周りを見渡す。

「だけど、なんだか薄暗くない・・・・・・？」

きれいな黒髪の女の子が、引きついた顔でつぶやくと、

「あつ！？」

金髪の子が、なにかを指差し声をあげる。

「なななな、何！？」

「うそ」

外人の様な女の子が、ニヤリと笑つた。

「つそでもいうな！！」

この3人、近所に住んでる中学生である。最近できたこの怪しきマ

ンションを、好奇心で見に来たらしい。だが、夜じゃ怖いので、昼に来たのだろう。

3人の名前を紹介しよう。

「もう、なんなのよ！だからあたしはいきたくなかったのにつ！つて、聞いてるマコト？」

泉^{イズミ} 亜紀^{アキ}。大人っぽい顔立ちに、真っ直ぐで肩のところできれいに切りそろえられた黒髪。いかにもしつかり者、といったカンジの子だ。1番身長が高い。

「・・・・・ゴメン、きいてなかつたあ。もつかいいつてえ」

比嘉^{ヒガ} 周^{マコト}。ショートカットでパツと見は運動部系。だが、けっこう身長が低く、体重も一番低い。おとなしそうな顔のくせに、左耳に、陰陽の模様のイヤーカフスを付けている。人の話を聴かないのと、なまりのある INTROVERSION が特徴。

「あんたはなんのためにその耳があると思つてんのー？」

ボリ、ボリ、パリ、パリ。

「・・・・・え？なんか言つた？」

パクパク、むしゃむしゃ。

「あんたはもう！・・・・・・つて、花まだ食つてんのー？」

ポテチの食う音のするほうへ、亜紀が視線を向ける。

「え？うん。あ、一緒に食つ？」

「・・・・・いらないわ」

「お前が食うの見てるだけで腹いつぱいだよ」

「？」

草切^{クサギリ} 花^{ハナ}。金髪の髪に、白い肌。おまけにキレイな透きとおつた青い目。どつからみても立派な外人のこの子。1番身長が低く、食べる割にやせている。

「どーでもいいから上にい」^{ハサウエイ}「あ」

この一言で、3人は2階に行くことになった。

上にいくには、階段かエレベーターを使うのだが、もちろん普通は

「レベーターが良いに決まってる。が、
「もうなんレベー」

「階段……」

「……」

亜紀が声を張り上げる。マコの声はあいつこいつまでかき消されて
しまった。

「レベーターなんてそんな、あんな四角い密室された箱の中でな
にかあつたらどうするの?逃げられないじゃな……」

「亜紀……怖いん」

「怖くないわね……」

「いや、だつたらエレ

「レベーター?ばつかじやないの……」

「階段でいくほうがバ

「階段!……」

亜紀がマコの声をやられいる。

「いや、わかったから、マコの話を最後まで聞け」

「よーし……階段でこぐわー!……」

花が、声を張り上げた。

3人がいった、その数十秒後。

「京子、京子……あれ、京子いないの?」

反対側の階段から、ひょこっと長身の青年が現れた。

「いないじゃない、来て損したわ

後ろのほうから、わいつうと、茶色のふわふわウーブの髪をした
女性も現れる。

「いや、確かに女の子の声がしたんだって」

「馬鹿いわないで。空耳じやなくつて?」

何かと毒舌な彼女の名前は北宮^{キタミヤ}梓^{アズサ}。その優雅で気品にあふれる彼
女のふるまいからして、どこかのお嬢さまだと思われる。

「うー、あー、そんなはずはないんだけどー」

若干へたれている彼は石川 宇宙。身長はけつゝつ高いし、顔もなかなかのだが、そのへたれで台無しである。

「いいから早くホールにいきましょう。管理人の女がまたなにかたくらんでるんだから」

「あ、そうだつた。でも京子が」

「ああ、もう！いいかげんになさいこのパソコン…！」

ガーン…まさかこんなにはつきりいわれると思わなかつた宇宙は、まともにショックを受けた。

「そ、そんな、ひどい…・・・・・」

「ああ、めんどくさい！なんで下つた階段上んじゃないといけないのよ

！－（きいてない）」

やつこいつと、梓はさつと上へ行つてしまつた。

「1Jの階段、・・・・・・・・・長つ！無駄に長い…！」

「うつさいわね。だいたい花は体力なさすぎなのよ」

騒ぐ花に、亜紀はうつとうしそうに言つた。

「お～い、もつと早く行かんばあ？」

「うつさい、死ね」

「なんで！？」

2人がキレるのも無理はない。こここの階段は異常に長いのだ。かれこれ10分、15分歩いているのに、全く出口が見えない。体力のない花はあまりのキツさに無駄にテンションが高くなつていた。

「テンションが上がつたつていうか、5度増してるつーか…・・・

マコトのためいきにすばやく花が反応する。

「はあ、何アンタ？自分がめちゃくちゃ体力あつて運動神経いいこと自慢してんの？うぜえよ、カス。ふざけんな、もつアンタは消えなさい。火葬とか土葬とかの前に海に沈めてやるつてんだよ、沖縄の海に沈みてえのか？ああ？このウチナーンチュイントネーション

「が

「何でええ?ー!」アヒーブが叫んでいた。「なんかしたつけ?」

「うるせえ！運動神経いい奴がムカつくんだよーーー！」

「...かみが逆逆一」

「……花、もうすぐ着くからだまつて」
「こんなどうでもいいことでインネンつけられ、マコトはいい迷惑である。はつきりいつた話、悪いのは通紀なのだ。通紀が階段といわなければ、花はこんな田にあわなかつたのだ。が、

それに對し花は、今までのう的態度を改め
「うふ、つかう。」とつてゐる。

そうなると、なつとくいかないのはマニアである。怒りのあまり思わずなまり丸出で怒鳴った。

「ええ、までまで、ええ！（沖縄の人は怒った時「ええ！」といふ）ヤーは（お前は）なんで亜紀とマコでは態度違うば？マコ何もしないやつしーてか、亜紀のせいやつしマコレー！意味わからん！－！なんでよー！」

死ね

「だからなんでマテ」おうなんだよおおー?ええ?ー?ー?」

そんなこんなで、にぎやかに3人は2階に着いた。

2階には、色々な部屋があり、ほんどうがまだ空き部屋だった。やはり中はキレイで、あの噂のマンションとは思えないほどだった。そして、少し行つたところに《ホール》と書かれた部屋もあった。

「ホー
ル?」

「あ、それ知ってるー！」

マサトがうれしそうに顔を上げた。

おはんが消える前にしゃべたんだけどなホーリーでと

「へえ、うの尊の叔母で、シベリヤには住民が集まつて色々なところがあるんだが、

「物知りな叔母さんね」

亜紀と花が、マコトではなく、さりげなく叔母のほうに感心した。

「いや、物知りつづーかさ、叔母さん、なんとか管理人の職業にあ

こがれたつづーか」

「「は？ 管理人？」

わけのわからん夢をもつていたマコトの叔母に、亜紀と花は思わず聞き返した。

「うん。消える直前にいつてたんだけや、3年後に本土ができるマンションが、あ、たぶんこの近くらしいんだけど、変わった管理人を探してるとかで。まあ、アノ人も相当変わってるからねえ」

昔を懐かしんでる年寄りのような田でマコトがつぶやいた。

「こここの近くなら行けば良いのに

「うーん、3年前の話で、3年後にできるマンションでつたら今年建つたつてことしそー？」この近くで今年建つたマンションなんてあつたけ？」

マコトが首を傾げて考える。

「ない、ない

「・・・・・おじやマン以外ないわ

「だよな~」

やつぱりないじやん、と、マコトと花は笑った。そんな2人に亜紀がもう1回だけ、答えを言つ。

「いやいやいや、だから、ないんだつて。おじやまんマンション以外。つーか、ここだよ

そして、はつとある。

「この近くで、今年建つたばかりのマンションはない。

「いいえ、おじやまんマンション以外は。

「・・・・いや、違つ。きつと隣の県ぐらこのマンションのことをいつてたのか

「さうね、きっと隣の県ぐらこのマンションのことをいつてたんだ

もしけないわ」

とかいいながら、明らかに動搖しているマコトと暁紀。

「でも当たつてたらウケルよね」

「「だまれドS」「」

花は、思つた以上になにもないこのマンションに退屈していた。これはいい退屈しのぎになるといわんばかりに、ニヤニヤし始めた。

「とにかく、ホールについて誰かにきいてみよつさあ」

「そうね。でもマコト、あなた今すぐいなまつてるわよ」

あせつてんのか、動搖しているのか、自分でもなまつてているのに気づいていない。

「なにいってるば、ちょっとしかなまつてないわあ」

「なまつてるつて」

「なまつてないさあ」

「それがなまつてんだよ」

まるでB級コントである。

そして、汗だらだらのまじと引きずつて、3人はホールへと歩いた。

たぶん、ここの中にはだれか人がいる。その人達から聞けばいい。それにここは思つたより悪いところではなかつたし、もしここの管理人がマコトの叔母でも、そんなたいしたことではないのだ。なんつたつて、3年ぶりの再会になるんだし、普通に感動の再開になるだろう。

マコト以外の2人は、その程度にしか思つてなかつた。

「花、開けて~」

ぐつたりしているマコトに肩を貸している暁紀が、花に頼んだ。

「OK、入いるよ~」

花が勢いよく扉を開ける。

そこの中には、2つの黒板、伝言板とかかれたものと普通のやつが

並んでおいてあって、大きなテーブル一つ、イスが何個かおいてあつた。かなり広い部屋だ。

その部屋の中心に一人、彼女は立っていた。

赤い仮面を被つた彼女は、仮面以外はただの女性だつただろう。だが、彼女は素顔を見せる」となく、そのマジレードの仮面を被つてそこにいた。

「おじゃマソレッド！ 参上！ ！」

レッドと名乗つたそれが、勢いよくテーブルから飛び降り、3人の前にきた。

「・・・・・は？」

「・・・・・！」 2人とは対象的に、ぐつたりしていたマコトが、びくっと動いた。

その声には、聞き覚えがあつた。

「！ ！」

梓が顔をぱつと上げて、険しい表情をした。

「梓？」

「あの管理人の声だわ」

忌々しそうに梓がつぶやいた。

「ああ、じゃあホールかな」

冷静に宇宙が言った。

「早く行かないと！」

「おちつけつて、動くだけ無駄だよ」

「なんですつて！ ？」

冷たく言い放つ宇宙に梓は怒つて振り向いた。だが、お人好しの宇宙がここまで言つのも訳があつてのことだつた。

「あ、と大きくため息をつき、宇宙は改めて周りを見渡す。

「動こうにも、閉じ込められちゃ動きようがないよ・・・・・・」

卷之三

さすがの梓せ、これには反論のしようがなかつた。

「私は昨日も引っかかつたわ！！」

「ダメじゃん」

とはかく、二人は大声で駆けを叫んでいくことにした。

卷之三

「お前やれよ！－！－！」

亞紀は思わず口めかみを押された。

この状況は、14年間生きてきた中で、どうりアクションしていいかわからないベスト10の3位以内には確実に入ってるであろう状況だった。

「…………」ちなみに、当の本人であるレッドは、

亜紀たちのリアクション待ちだつた。

「トロボーリ、凶魔トロボーリ」

「これ以上のリアクションは無理です」

「もっとバリエーションにとんだアクションを身に付けなさい」

卷之三

この人は、運営しているのだから、それが

「…？」

が、アーティストの

• • • • •

マコトはジーっとレッジのことを穴が空くほど見つめていた。

「あのー！」

そして、腹を決めた様子で、勢いよくしゃべりだした。

「つかぬ」とお聞きしますが、
かおるへとこひがひて身
に覚えはありませんか?」

「つかぬことも何も、どうみても本人じやない」

「す、ずいぶんと真っ赤なお顔になられられられ、マコトの体からドツと冷や汗が滝のように流れ出す。

「3年前よつ日本語下手ね」

だんだん顔から血の気が引く。隣にいる母紀にも、すべてわ

つまり、彼女はマート……………叔母なのだ。

バーン！！突然ホールのドアが開く。

「ちよーつと、まつたああ！」

今度は、ピンクの仮面の、声からしてマコト達と対して歳の変わらないであの女の飛び出してきた。

疲れた表情で亜紀が言う。

「ええ！？ ヒドツ！ まあいいわ。あたしの名前はおじやマン仮面ピンク！ ！ ところでレッヂ、自分の名前勝手にばらさないでよ！ ！ ！ だが、そんなピンクを軽く無視し、カオルはしゃべり続けた。

「あなたもずいぶん変わったわね」

「きかえーーー！」

「さすがね、人の話を聞かない家系なのかしら」

あきれを通りこして、感心する世紀。ふつむけ内心でせどりでも

よくなつていいのだらう。そんな亜紀のとなりで、明らかにイララしているピンク。仮面で顔を隠しているのに、ここまで喜怒哀楽を表現してしまう彼女はスバラシイ。

「あ、そうそう。それであなた達に渡したいものがあつてきたのよ
突然そんなことを言い出すカオル。

「大丈夫、変なものじゃないわ」

とてつもなく優しい声でカオルが言う。

・・・・・はつきりいつて、信用できない。

嫌な予感を人間の第6感でかんじつつも、2人は慎重に答える。

「見るだけ見ます。・・・もうつかどうかは後ですよ?」

「・・・とりあえず、何なんですか?」

「えーっとね~・・・」

「・・・・・・・」

がさーいそとあらかじめ用意してあつた袋から、カオルが何かを取り出す。

そして、その取り出したものは・・・・・?

「これよ!~」

「・・・・・」「・・・・・あー」

おじやマンイエロー・ブルー。

「いるかああ!~!~

切れた亜紀。

「あら、どうして?」

「・・・・・どうしてもです」

切れる亜紀をなだめつつ、これ以上騒ぎを大きくしないように、不思議そうに聞くカオルにさりげなくマコトが断つた。

「残念だわ・・・・・。あなた達2人が入れば5人そろつたのに
本当に残念そうにカオルはつぶやいた。

「そんな遊び、とんでもない馬鹿以外やらないわよ

「?ちょっとまって亜紀。カオルさん今、くあなた達2人くて言つてなかつた?」

「マコトはわかった。そう、奴がない。」

「え？ わたしと、あなたと、花と…………。あれ！？ 花は！？」

「…………。さつきからいないうてば、あのどじ」

嫌な予感がビンビンする2人。あいつに限ってそんなこと…………。

・つてのはない。あいつだからやりかねないのだ。

「できなさい、おじやマンホワイト！」

カオルが高らかに叫ぶ。

「おじやマンホワイト…参上…」

「「花あ！！」」

「おつす」

おつすじやねーよ。てめ、今なにやつてんだよ。なんで白い仮面被つてんだよ。

怒りを抑えつつ、亜紀が聞いた。

「わざと仲間になつたわね…………」

「もちろん！！」

ブチッと亜紀のこめかみから何か聞こえた。

「あ～、梓？」

「なによ」

「いくらなんでも、これはないよね？」

「あたしのせいっていいたのー？」

「お前のせいだろつ！」

全身水浸しの2人は、イライラモード全開で怒鳴りあつていた。

「だいたいクイズゲームなんてマンションにある自体おかしいのよ！」

「マックのフルネームも知らない奴に言われたくないんだけど……

・・・」

もちろん宇宙のつぶやきを、梓はきいていない。

「じゃあ何!? あなたは知つているの?」

「マクドナルド」

・・・・・。

「も、もちろんしつてたわよ!..」

「うそつけ! だから水浸しになつたんじゃねーかよ!..」

「で、仲間にならない?」

「いや」

「今ならなんど、『ゴールド』と『シルバー』がもれなく無料!..!..

「いやいやいや、いらぬいって」

「無料?」

「じゃあどうしたいのさ!..?」

「なにもしたくないわ。むしろ帰りたい

「あ〜・・・・腹減つたなあ」

「あたしだつておなかすいたもん!..」

「で?」

「どうあえず、話をもどせ!..」

しつこく誘つてるのが花。とにかく断つてはいるのが亞紀とマコト。

「だいたい、さつきから正義のヒーローみたいなことしてると、

悪の軍団がいないじゃない。それじゃヒーローの意味ないわ」

亞紀がいいところに手をつける。確かに、ヒーローには悪がない

と成り立たない。

が、カオルは得意げにこの疑問に答えた。

「もちろん、悪の軍団くらいいます」

「「!..」

きいてないよ!..といわんばかりにピンクとホワイトがカオルを見る。

それでもカオルは一人で続ける。

「その名も、おじゃマンデビルです」

しらねーよ、そんなの!..いやだよそんなダサい悪の軍団!..!..ピンクとホワイトは色々目で訴えたつもりだが、カオルには何一つ届いて

なかつた。そして、カオルの説明はまだ続く。

「そり、そして、その悪の軍団は、……………。
……………あなた達です――！」

「「まああ！？」

いきなり指をされても、キレる」しかできない2人。

「ちなみに、名前は怪人ツツコーミとウチナーンチュなまりです」

「ウチナーンチユ？なまり？だから全然なまつてないさあ！」

「「ジ」まへ裏刃り首

怪人ツツ「ゴーミヒウチナーンチュなまりはホワイトに向かつて切れ

たが、アーティストとしての才能を認められ、多くの賞を受賞する。

2人にむかって突っ込んでくるピンク達。

うわつ、その掛け声はダメだつて！！」

「あんた達の『』が悪役『』いんた!』と!」

「おお、覚悟おつた……」

「ちよーつと、まつたあーーー。」

バーン！と、またホールが勢いよく開く。

「その馬鹿げた遊び、ストップ！！」

飛び出してきたのは、茶色いふわふわの髪の女人と、げつそりと疲れた顔の男の人だつた。

「いい加減にしなさい。こんな無関係な子まで巻き込んで！」

良かつた、まともな人だつた。亜紀とマコトは心底ほつとした。これでもう安心だ。

すると、男の人ピングのほうをじーっとみて、

「とゆーか、そこのピングの仮面の下、・・・・・キョウウだよね？」

「あれ、おにいちゃん？」

キョウウ？

え？ピング今、お兄ちゃんつていつた？

マコトたちはわけがわからない。

ところによれば、どうこうことだ？つまり、ピングのお兄ちゃんがアノ人。そしてアノ人はピングになんと言つた？

・・・・・キョウウ？

「あやははは……キョウウだつてよ、キョウウ……」（花

「・・・・・キョウウ」（亜紀

「偽名ですか？」（マコト

「なによ、なにがいけないのよ……本名に決まつてんじやない！石川 イシ

杏子 キョウウ よー悪かったわね！……」

確かに、いんなイケイケな女が杏子といつのは、あまり似合わない気がする。

「・・・・・それで、梓さんと宇宙くんは何の用ですか？」

カオルが口を挟む。

その質問を待つてましたといわんばかりに、梓がカオルをキッと睨む。

「何の用ですって？決まってるじゃない！あなたのその馬鹿げた遊びを止めるためよー！」

「……………まあ…!?」

卷之三

あまりの唐突さに、フレイドが驚いたのかの様も、どう対応していいかわからず、思わず間の抜けた声を出してしまった。

「まーたあの人は・・・・・・」

あきれた宇宙はこれ以上モノがいえなかつた。

「ね、アヒル、あれ、

花が気になつた

「あんたこもあれと同じDNAがま、

「…………ん? あ、ゴメンきてなかつた」

「花、同じDNAよ。間違いなく」

そして、そのマコトと同じDNAをもつカオルは、梓との戦いのル

ールを説明していた。

ルールは簡単、相手を戦闘不能にするだけ！肉体的だろうが、精神的だろうが、

神的だらうがかまいません。どうです、やりますか！？」

「股開け立つわ！」

始まりでしまった。

真剣な2人をよそに、この遊びには、

は、せんべいを取ってしまった。
まあ、うとうとうのソラの顔は

さあお待たかねのビンケの素彦
「・・・・・つりあ（マロ）」

「アーニー、アーニー、アーニー！」

「すつげえ」・・一(花)

ピンクこと和子は、真っ黒のボーボーテールの髪をした、

すつごいおとなしくてか弱そうな顔をした少女だった。

「整形しました？」（マコト）

「・・・あんたそれ天然？」

カオル達に話を戻そう。

2人はまだ1ミツも動かずに、睨みあつていてる。

ぴくつ

カオルが動く。

「・・・・・・・・」

梓の顔がこわばる。カオルはすうっと息を吸い込み、口を開いた。

「梓・・・・・・・」

「！？何ですか？」

「・・・・・・イケメンは、イケてる麵つてことじゃないのよ」

「えええ～！～？」

勝負はついた。梓はついた。梓はショックのあまり、崩れ落ちてしまつた。

カオルが勝つたのだ。

「ああ、知らなかつたんだ。イケメンの意味・・・・・」（宇宙
きつと調子に乗つてあつちこつちのそば屋で使つてたのよ」（杏子
「てゆーか、イケメンつてもう死語？」（マコト）

「あほらし」（花）

「帰ひづ・・・・疲れたわ」（亜紀）

杏子と宇宙に別れを告げ、3人はおじやまんマンションを後にした。

「けつきょく何しにきたんだつけ？」

「・・・ほんつとに疲れた」

「叔母さん、何がしたかつたんだわ？」

疲れた表情で3人は（たぶん花も）誓つた。

おじやまたマシンショーンに行かれたのみでつづけられました。

「ところで2人とも、青と黄の仮面いらない?」

「『捨てぬお絆』…。」

第1階・おじやまなヒーロー（後書き）

はじめての小説なので、わかりずらい点もあるかもしません。何かいいアドバイスがありましたらぜひ教えてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2971a/>

おじゃまんマンション

2010年10月12日21時21分発行